

# 知識探訪

多民族社会の横顔を読む  
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

## サラワク州議会選にみる地元政党の圧倒的存在感

山本博之 (京都大学地域研究統合情報センター准教授)

2016年5月7日に行われたサラワク州議会選挙では、連邦の与党連合・国民戦線 (BN) が、BNの中核政党でナジブ首相の出身母体である統一マレー国民組織 (UMNO) による多数の応援を受け、定数82議席の72議席を占めて圧倒的勝利を収めた。半島部に基盤を置く野党・民主行動党 (DAP) は、サラワク州議会選挙で候補者を立て続けて17年目の1996年によようやく初当選を果たし、それから15年間で12議席まで増やしてきたが、この選挙で7議席まで後退した。

この選挙結果を大雑把に言えば、BN (UMNO + 地元政党) とDAPが争ってBNが勝ったということになるが、それをプロンプト対華人のように民族別に見るだけでは中央対地方というサラワクの文脈を見逃すことになる。今回の選挙はBNの勝利というよりサラワクの地元政党の勝利であり、議席数を増やしただけでなく、以下に見るように「UMNOは要らない」と公言できたことがサラワクの地元政党にとって一番の「勝利」だったのかもしれない。

マレーシアの選挙と言えば、道路脇や建物に大量かつ無秩序に貼られる政党の旗や候補者のポスターが名物だ。地方に行けば手描きのイラスト入りのユニークな選挙ポスターも珍しくない。最近ではソーシャルネットワークの発達もあって街頭の旗やポスターは減る傾向にあり、サラワク州のクチンでも2011年の選挙から旗やポスターが減ってきて、今回の選挙でもさらに減っていたが、それでも大きな道路が交わるラウンドアバウトなどには与野党の選挙ポスターがいくつも立ち並んでいた。



今回の選挙で目立ったのはサバ州を引き合いに出した選挙ポスターだった (写真)。「サラワクの自主権を守れ サバのようになるな」「サバの二の舞になるな DAPが躍進したらUMNOがサラワクに進出してくるぞ」などと書かれている。UMNOがサラワクに進出してきたら州の自主権が失われて

しまうので、UMNOにサラワク進出の口実を与えないようにDAPに議席を与えるなど訴えている。興味深いのは、州の自主権を唱えてUMNOの進出を嫌うこの選挙ポスタ

ーを立てているのがBNだということだ。連邦レベルでUMNOと連立を組み、今回の選挙でもUMNOに多数の応援に来てもらっておきながら、「UMNOが来るぞ」を脅し文句に使っている。さらに、名指しされたサバでは、UMNOの幹部が、連邦政府からの支援が減るとサラワクのように地元政党だけになってしまい州行政のコントロールがきかなくなりかねないと応じた。

これは、サラワクとサバが互いにけん制しあっている風を装いながら、ともに連邦政府から譲歩を引き出そうとする工夫の現れである。半島部では与野党の勢力が拮抗 (きっこう) しており、連邦与党のBNにとって政権運営のためにサバとサラワクの支持が欠かせない。サバもサラワクも州与党はBNだが、中央 (半島部) との関係はそれぞれ異なる。サバでは1990年の選挙で地元与党がBNと対決姿勢をとったため、UMNOがサバに進出してサバBNを組織し、2003年以降はUMNOがサバBNの過半数を占めている。一方でサラワクにはUMNOが進出していないため、地元政党が構成するサラワクBNと半島部のBNが緩やかな連携関係にある。

UMNOのサバ進出でサバは中央の影響下に入ったが、選挙の候補者選びや州の予算などを見ると中央の影響力は助言程度にとどまっており、逆に中央のUMNOにサバBNを支援する必要が強まっている。サラワクは中央のUMNOから指示を受けないという意味では自主性が高いが、選挙や開発政策などで中央から必ず支援が得られるとは限らない。サバのように助言を受ける態度を取りつつ支援を引き出すのか、サラワクのように支援を当てにしないかわりに介入も受けないのかは、それぞれ地元の事情などによって選択された結果なので単純に優劣を判断できるものではない。いずれにしても、サラワクは「サバのようにならないように」、サバは「サラワクのようにならないように」と言って、それぞれ理由をつけて連邦から譲歩を引き出そうとしている。

### < 筆者紹介 >

1966年、千葉県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修了。学術博士。マレーシア・サバ大学講師、国立民族学博物館助教授などを経て現職。専門はマレーシアの地域研究。サバ州の民族分類やジャウィ (アラビア文字表記) の社会的役割、災害復興時の社会形成など関心領域は広く、東西マレーシアおよび周辺諸国でフィールドワークを繰り返している。日本マレーシア学会 (JAMS) 運営委員。